



大分県立竹田高等学校
 関東同窓会報
 第7号
 発行者・会長 後藤 鉄石
 編集者・足立 五郎
 発行所・関東同窓会事務所
 東京都中央区築地2-7-12
 15山京ビル2階205号
 03-3543-8747

シンポジウムを司会して

志生野 温夫(昭26年卒)

同窓会は楽しい。待遠しくさえる。先輩や友人、後輩達との貴重な交流の場となる。まして、青春の思い出がいっぱいにつまった高校時代はなつかしい。故郷を遠く離れていけばなおさらである。大分県立竹田高等学校同窓会が年々盛大になっていくことはよろこばしい限りである。

しかし、ふり返ってみれば、同窓会にこそいそいそと出掛けるようになったのは、五十を過ぎた、比較的最近のことである。若い頃は出席してもせいぜいクラス会か同期会、同窓会は年寄りが多く、県人会はえらい人ばかりで、最初から敬遠したものである。

ところが今は、クラス会、同期会は万障繰り合わせ、同窓会、県人会も出来るだけスケジュールを都合して出席の返事を出す。会場でなつかしい顔に出会い、近況を話し合うだけで充分満足である。家人が最近急に増えたこの種の会合の多さにあきれた顔をしている。子供達に言わせれば、大分病、竹田中毒

である。旧友に会えればそれだけで元気になる、時の経つのもわすれる。竹田と聞いただけで目の色が変わる。病気と笑われても仕方がない。自分でも不思議な今日この頃なのである。だから、クラス会でも同窓会でも、なつかしい雰囲気御馳走なのだ。本来、挨拶も余興も必要ない。例えば、アトラクションに歌手を招んでも、会場ではみんなろくに耳を傾けようとはしない。ゲスト歌手に失礼なケースが多い。

司会をしていつも感じることだ。一生懸命歌うゲストに申しわけないと思う反面、納得もする。とにかく、話はずむのだ。アトラクションがせっかくの団楽ムードをぶち壊しているケースが多い。

幹事所感

古庄 隆史(昭36年卒)

考えてみれば不思議な気がする。高校生活とは人生の中でもわずか三年という短い期間でしかないし、しかも同じ時期に顔を会わせることの出来た学年は前後の学年でしかないのである。母校を遠く昔に卒業し、遠く離れた東京で二〇〇名もの人々が一堂に集り、懐かしげに談笑する光景がまず不思議であった。

竹田高校関東同窓会の今年度の総会は去る六月二十日開催されたが、今回から幹事を卒業三十年目と四十年目の両年次が担当することになり、私共三十六年卒業組が二十六年卒の先輩を手伝うことになった。私自身今まで総会

で充分だ。当日は現校長から母校の近況を報告していただき、なつかしい恩師にお会いでき、先輩、友人、後輩達にあえれば文句はない。しかしそれでは当番学年となり、窮余の一策として、苦しまぎれに出された企画が、「竹田を考えるシンポジウム」だったのだ。

アトラクションに代る、イベント感覚の提案だった。これに竹田在住の同窓生諸兄が真剣に乗って下さった。竹田の現状を関東の同窓生に訴え、意見も是非お聞かせ願いたいと言うのだ。前夜から東京入りして、関東側のパネラー達と打ち合わせをする熱心さだ。当日は地元竹田、関東、そして行政側からも責任者が参加し、パネラー達のディスカッションも白熱した。会場からも多くの貴重な発言があり有意義だった。同窓会が個人的な感傷の場から一歩抜け出し、皆んなで竹田を考える公の場となった。

司会をしながら、こんな同窓会もいなあと思った。これなら、若い同窓生達ももっともっと参加してくれるかも知れない。自分の昔を思い出して思うた。

私も一度も出席したことがなく、まったくの門外漢であった。幹事となってから何度か打合せに参加したが、メンバーもほとんどが初めてお目にかかる方である。結局は最後まで先輩幹事にお願いのしっぱなしで、ほとんど戦力になれず申し訳けなく思っている。しかし個人的にはこの手伝いを通して大変いい経験をさせてもらった。

「母校」とは、自分の生まれ育った土地であり、青春時代を学び遊んだ所であり、友人達との思い出の跡であるけれども、一方現在の生活とは遠く離れた存在でもある。クラス会や同窓会はそうした日常を離れたいわば祭りのようなものであろう。そして旧友と語り、共通の青春を思いだし懐かしみ、それが清涼剤となって、また仕事や家庭生活に活力を与えるのであろう。

私自身、卒業して三十年も経ちながら、母校に何の恩返しも出来ず申し訳なく感じているが、恐らく同じ思いを抱いている同窓会員の方々も少なくないのでは無かろうか。今回の総会でも参加者を募るのに大変苦労したが、一般会員の立場に立つてみると、なかなか出席出来ないことの方が当然のように思われる。時々参加するからこそ祭りであるし、楽しいのではないか。今回参加できなかった会員の方も毎年とは言わないが、何年かに一度顔を出してみることがぜひお薦めしたい。これが今回幹事のお手伝いをし、同窓会で多数の方と懇談できた私の感想である。

総会の幹事として今回のような方法を作るためにもいい考えと思う。来年の幹事年次の人は、そういう意味でもぜひ積極的に参加していただきたい。そしてできるなら、卒後十年、二十年目の年次も準幹事として協力しては如何であらう。祭りが終われば、またいやでも日常生活が待っているのだから。

先輩を訪ねて

座右の銘は「和氣致祥」

お客さま 工藤幸男氏

とき 平成四年十月二十八日

ところ 富国生命ビル富国俱樂部

聞き手 足立五郎

「今日は貴重なお時間を割いて下さいましてありがとうございます。」

早速でございますが、ご出身は大野町の両家と伺っていますが、当時の大野町のことや小学校時代の思い出からお聞かせ下さい。

工藤 ランプから電灯に変わった翌年、私は、東大野村立大野尋常高等小学校に入学しました。汽車が犬飼から緒方朝地、玉米まで順次開通の頃です。大正十五年三月尋常科を卒業し、竹田中学校に入学しましたが、この年母校の名前が大野から南部へ変わりました。

「昭和の初期は大不況の時代でしたがそれにかかわる中学時代の思い出はございませんか。」



1992.10.28

工藤 百姓の長男、不況と、悪い条件のもと、小学校のある先生が強く口説かれたおかげで父が受験を許してくれました。

合格者は一五六名、二倍の競争でした。県下の新聞に載り活字のわが名を始めて見ました。

とができ、一ヶ月の賃金二十七円が旅費となり助かりました。

三重税務署では地租の担当に始まりましたが、その秋任官試験があり、私は署長の勧めで関税事務を受け幸に合格しましたが、行政整理の直後とて、任官は二年後の実現です。しかし、この二年半、直税事務全般から耕地整理法まで勉強でき、当時の郡内二十六ヶ町村全部を自転車で回り役場の方々や、登記所の職員と親しむことができました。

任官は、北九州の折尾町にあった遠賀税務署の直税課で、八幡、戸畑、若松の三市と一郡、つぎに十四年小倉税務署に転じ小倉、門司の二市と一郡の所得税法人税の調査を担当しました。紀元二千六百年を祝う年に初上京で、十二月までの三ヶ月を大蔵省の講習会に受講、翌十六年九月大蔵省へ出向を命ぜられ、主税局勤務となり、池田勇人経理課長の下で、歳入の予算、決算の担当となり、以来十三年間一筋に勤めました。

「嫌な思い出かと思いますが、軍籍関係は。」

工藤 昭和八年に徴兵検査を受けました。学課は満点でしたが、徴兵官から「惜しいかな身長が足りない丙種合格兵役も税務も国への奉公は同じだから精を出すように」と付言され、その後簡潔点呼ではいつも甲種でしたが、ついに召集は来ませんでした。

「上京後は大蔵省の主税局勤務、戦中戦後の税務行政は、私共には想像も出

来ないのですが。」

工藤 主税局の歳入事務は、毎年度の租税等一般会計の収入を見積り、予算書を作り、歳入の決算を調査し、国会に提出する仕事です。十六年から十九年までは戦中の空襲下、戦後の混乱期、占領下、朝鮮動乱等と経済の変動著しい中で、生産、物価、賃金等、乏しい統計を集めこれを基に、参考になる意見等を勘案し数字を纏め上げる難行苦行の想い出が尽きません。

国会の予算、決算、大蔵の各委員会には大臣、局長、政府委員のお供に、書類の風呂敷を抱えて随行、質疑応答の場を味いました。ある時、メモを見ながら国会の廊下を急ぎ歩き中、吉田首相に角でぶつかりそうになり、お付きの人々を慌てさせ恐縮したこともありま

す。上京の年、同郷先輩との忘年会は十二月七日、翌朝は真珠湾攻撃、軍艦マーチのラジオに昨夜の酒もふつとندیまいました。

昭和十九年家族を天野町に疎開させ、妻は馴れない百姓仕事、私は神田の猿樂町の寮で度々の空襲から宿舎を護ることができ、二十一年の春、本郷の六畳一間に呼び戻すことができました。

「膨大な難しい計算が多いわけですがどんな計算機があったのですか。」

工藤 昭和六年頃から複雑な乗除計算には手回しのタイガー計算機が三重署にも一台ありましたが、算盤至上で、統計の集計には二台以上を同時に使う場合もありました。二十四年、大蔵省で初めて電気計算機を使わせて貰いました。三十四万円のファシット卓上テンキーで、計算中にも次の段どりを考えられるので助かりましたが、今のポケット電卓やコンピュータの時代は全く夢の実現です。

「最後に座右の銘の「和氣致祥」についてお伺いいたします。」

工藤 出典は中国の劉向、前七七一前六。前漢末の学者。和は吉祥をもたらす。文字どおり、私の信条に合いますので一時年賀状に朱墨で何年か連用しました。

「今日は、大変有難うございました。ますます、ご自愛ご健勝のほどを願っております。」

工藤 幸男氏略歴

大正2年5月大野郡大野町にて出生。昭和6年旧制竹田中学校卒業。同8年三重税務署署長。10年任官して遠賀税務署。14年小倉税務署。16年上京大蔵省主税局勤務。主として租税等の歳入の予算決算事務を担当。29年大宮税務署長。31年関東信越国税局徴収部徴収課長。32年同調査査察部調査課長。34年東京国税局調査査察部調査第五部門統括国税調査官。37年浅草税務署長。38年東京国税局直税部法人税課長。40年同調査第二部次長。42年国税庁首席監督官。44年同協議団本部長。45年初代広島国税不服審判所長。46年退官。58年秋勲四等旭日小綬賞受賞。59年春園遊会招待。現在税理士。事務所。千代田区内神田3-4-4新千代田ビル5F。

会員の語らい

『発想の転換』
電話料金について

河野 祐司 (昭16年卒)

すべての行動は、それ迄に得た情報を咀嚼吟味した結果として導き出されるアクションである。この自由競争の社会で、人に先んじようとする行動はその情報が正確詳細で且つ迅速であるとき、初めて有効になるもので、その為のごく自然の努力が、現在目をみはる通信機能の発達をもたらしたと言えるだろう。

さてそこで、この通信機能の一つである電話であるが、最早各家庭の必需品となり、公衆電話に至るところにあり、自動車にも飛行機にも、更に歩行中さえこれを利用する現状は、その料金算定の上に、早急でしかも抜本的な改革の爲の『発想の転換』を提起し、御賛同をいただきたいと願う次第。第一電々が出来、第二電々が出来、益々ややくしくなる行政上の問題が発生して、



金村 克敏
料を司
基を野
の全河
話のえ

円である。3分以内である故にであるのに距離が100m以上の地点(例えば東京から名古屋大阪等)へは200円となる。この格差たるや正に20倍、同一の話の量で(同じ3分である故)これ程違う料金に疑問をもたないのが不思議なのだが如何だろう。よりよく理解して戴くために、格好のサンプルとして郵便料金を考えてほしい。全国何処に出してもハガキは41円である。62円からスタートして重さにより加算される。手紙の内容はその重量に比例するが故に、誠に理に叶った算出方法で、そこには距離の感覚はない。電話料金も又同様に考えてほしい。通話の量はその時間によってのみ増加するのであり、従って料金は時間に依って加算されれば良いのである。勿論算定するに当り採算のとれる曲線を出して欲しい。電話開設の初期は、贅沢品としてお金持が別荘に引く電話よろしく受益者負担という考えがあったであろう。しかし時代はすでに変わっているのである。税金で架設された全国的通信網に、瞬間数分の電話の飛び交う現状の姿は最早国民の血であり空気となつていっている。須らく平等に享受される電話として、等しからざるを憂うる政治を願いたいと思うのだが。

遠くに住めば住むほど、政治経済の中心である東京からの情報が高価なものになる現状は、国民をして出来るだけ中央に住むべしという無言の圧力であり、中央地価高騰又過密の一因となつていっているのだが。又ごく庶民的な説明をすれば、例えば遠く北海道に嫁いだ娘にも隣の町に嫁いだ娘と同じように、気兼ねなく電話が出来る親でありたいと思う筈だと考えるのだが。須らく、地方の村長・町長・市長。そして

「ボケ防止」 それなりに

長谷川 律子 (昭32年卒)
(旧姓本田)



故郷を離れて36年、グラントパレスにおける同窓会に初めて出席しました。若々しい大先輩にお会いし皆様退職後それぞれに興味をお持ちのご様子、私もそうありたいと新たに思った次第です。誰しも決して通りたく無いボケの道。一寸道草をさせて下さい。明治大正・昭和そして平成と、20世紀を丸ごと生きてまいりました義母が2年前天寿を全う致しました。

我が命さきくであらば春の野の
若菜つみつ、行きてあひ見む 良寛

この歌の気持ちか他人事で無い年齢になりつ、あり、95歳の日々を思うと気が遠くなります。思いますが曾孫を含めて十人の大家族と同居を共に、針仕事を好み少し威張って、我が道を行く人生でした。しかもボケも寝込みもせずに達者でその事実だけで畏敬の念を……立派でした。常にそうありたい

果敢の方々に、すみやかに発想の転換を希い、結束してこの等しがるべき政治の推進を主張して戴きたいのである。全国融和地生活性の一助になることと請いである。人類自然のニーズから作り出された文明の利器は、ごく自然に平等に使わせて戴きたい。これが基本の思想であり、少なくとも実施可能な同一国内に於て然りと考えるのだが如何だろう。

と願うては居るのですが。

さて本題に戻りまして、私としては趣味と実益を兼ねて16年間木彫り続けて居ります。昨年桜咲く頃「上野の森美術館」で会員の一人として作品を飾る事が出来ました。教える事も教わる事も自分の励みとなり、ライフワークの大切さはこういった型が意味深いのではと思われまます。

広がって居ます。又私は亡き父を初めて兄弟姉妹と多くの全て同窓、生来楽天的で単純。トイレの百ワット(無駄な明るさ)と言われ、結局のところ、拘らず切り換えが早いのが長所であり短所でもあるのです。だから諦めも早く何事も前向きな考えに辿り着きます。

次に私にとって感動する事の一つはやはり山でしょうか。田舎の松本村で久住祖母山を見て育ち、思えば六年前三ツ峠からの富士の雄姿が忘れられずに病み付きになりました。風爽やか頃になると恋人にでも会う気分が胸が騒ぎ山行きです。足慣らしに大菩薩峠から始まって、印象深い山へ随分出掛けました。

八甲田・蔵王・西吾妻・安達太良・那須・白根・木曾駒・乗鞍・上越は平標山等々。そして今夏は念願の大雪山系主峰の旭岳へ。天候に恵まれ御度の大バノラマに万年雪、黄バナシヤクナゲの群落と北の大地の雄大さに一時自分を忘れて居りました。

寿命の延びた昨今、感動する事を失わずそれに喜びを覚え、前向きに生き、若い人とも付き合ひ、手先を使う木彫りをして来て、それなりにボケ防止に役立っているのではと感じるこの頃です。

そうそう忘れていました。最後に東京は、好奇心の塊である私にとっては退屈する事を知らず刺激の多い有難い存在です。

皆様どの様な老化対策をお持ちでしょうか。次にお会いしました折りにでもお聞かせ下さい。私五十代 今輝いています。

ふるさと便り

大自然からの活力

本部事務局長 波多野 英次(昭28年卒)

関東同窓会の皆様お元気で御活躍の事と拝察致します。九州アルプスのふもとに開けた城下町竹田市の四方の山々は、本年はひとさわやかな紅葉で、まさにエデンの郷であります。加えて高女の校歌には「水上遠く流れくる稲葉の川の清きかも」の一節があります。このすばらしい山河を擁する大自然のパノラマは言語に絶するものがあります。豊かな詩情と厚き人情に育まれてこの街から多数の先哲が輩出したのは極めて自然な気が致します。



本部・同窓会総会、バックは「コーラス稲葉」の皆さん
1992年10月

先般十月中旬に、本部同窓会総会をホテル岩城屋にて開催しました。ちなみに岩城屋の普連一郎社長も同窓会の副会長であり、いろんな面で御無理を聞いて頂きました。竹中、高女、高校の多数の同窓生に加えて高女の恩師である金城静枝先生が松山市からお元気なお姿を見せ、会を一層盛り上げて頂きました。

本年の生徒会の活躍には目を見張るものがありました。従来の文化祭、体育祭を統合して臥牛祭と命名し、展示会のグレードアップ化、活性化に加えて、地域の人々との強調、例えば先輩達による岡城太鼓の競演、三重町のプロによる津軽三味線の演奏等、色々な企画をみなさんが一体となって具体化してきた事が、大好評を博しました。

瀧 廉太郎のこと

彼は日出藩の上級武士だった瀧家の長男として東京で生れ、幼年時代官吏であった父の転任によって神奈川・富山・大分と短期間に転々と移り住んだ。彼にとっては日出は勿論自分の生れた東京も、終焉の地になった。

大分も「ふるさと」と言うにはあまりにも印象の浅い所ではなかったようであるが、ただ十二歳から十五歳迄の約四年間の竹田で過ごした歳月は、利発で感じやすい少年であった彼にとって、は終生忘れ得ぬ印象深い地となって鮮明に彼の脳裏に刻みこまれたようである。ふるさととは、竹田であり、彼は竹田人であると信じているのである。

祭を統合して臥牛祭と命名し、展示会のグレードアップ化、活性化に加えて、地域の人々との強調、例えば先輩達による岡城太鼓の競演、三重町のプロによる津軽三味線の演奏等、色々な企画をみなさんが一体となって具体化してきた事が、大好評を博しました。

後藤 是美 (久住在住)

武士の血を受け、官吏の父をもって生れ、もの心ついた頃は、武士階級の没落という社会変動のあおりを喰って、武家の出であるが故に一般庶民の社会から敬遠され、一種の差別的な隔離状態におかれる世相であった。一般庶民の人たちからは、特別待遇の別世界の子供として敬遠され、容易には仲間に入れて貰えないという風潮は、ご多分に洩れず当時の竹田にもあった筈である。



竹田に於ける彼をとりまく周囲の人々は肉親を除いては学校の先生か、限られた極く僅かの学友たちだけであった。環境によって、好むと好まざると

は男女一名の落伍者も無く元気に完走しました。沿道の父母や一般社会人の応援も頂き一大イベントに発展しています。

去る十月九日、同窓生の広島大の伊東亮三教授の生徒に対する講演会が開催され、職員生徒一同深い感銘を受けました。

次に今年の本校生の進路ですが、企業関係の採用は終了しました。日銀、新日鉄、九電、トキハに各一名計四名が内定しました。公務員は県職一名、国家三種九名が一次合格しています。

進学関係は、現在三年生が最後の追い込みをかけているところです。延べ数で国公立大七十二名、私立大百四十

二名等、短大九十名、看護専修学校七十四名です。模擬試験では久し振りに上位ランクの生徒もおり来春が楽しみです。

部活動の運動部では山岳、弓道、剣道、陸上等が九州大会、全国大会へ出場しています。文化部では、近年は毎年のように全国高校生エッセイストコンテストに入賞者を出しています。

立派な施設も完成の域に達してあります。竹高生も活気が出てきました。今後は諸先輩に勝るとも劣らぬ立派な人材が巣立って行くものと確信しております。今後共になにとぞ御指導をお願い致します。

武士の血を受け、官吏の父をもって生れ、もの心ついた頃は、武士階級の没落という社会変動のあおりを喰って、武家の出であるが故に一般庶民の社会から敬遠され、一種の差別的な隔離状態におかれる世相であった。一般庶民の人たちからは、特別待遇の別世界の

にかかわらず、孤独を強いられてきた彼にとつて竹田の自然は終生忘れ得ぬ思い出を残して強烈な印象をもって、多感な彼に迫って来たようである。

彼はよく岡城址に登っては、古く荒れ果てた城址の草に独り寝ころんで、はるかに、往く雲を眺めていたであろう。そこには死んで行った武士の幻影があつた、おたけびの音が聞こえた、勝利の宴に酔った人々の姿がほうふつと現れた。孤独の寂しさに馴れ親しんだ彼にも、時折そこに無心に遊ぶ自分と

すが歯科クリニック
菅 眞一 (昭40年卒)

港区六本木7-3-12
六本木インターナショナルビルB1
TEL 3478-4995

診療時間 10:00~午後6:00

同じ年ごろの子供たちの、自由な世界にひそかな憧れをもつこともあつたであらう。

彼の音楽家としての全貌については知る由もない。しかし私の知っている数少ない彼の作曲したものの中にも竹田のもつ「芸術的」な影が揺曳しているように思われてならない。

それと、常識的に考えてみると、彼の作曲したものは合奏曲であるものよりも、むしろ独唱、斉唱の曲としての方が、よりすぐれている曲が多いような気がする。極言すれば「つぶやき」と言いたいほどのものさえあると私には思われる。こうしたことは勿論彼の性格にもよるものであろうが、竹田の雰囲気での彼の環境などによる非常に深い感動と印象がその調べの中に現れているとも感じられる。あれやこれや、私は竹田は彼の心の「ふるさと」であつたと信じて疑わない。

クラス会の動き

二十五周年全国大会

桑島輝茂 (昭42年卒)

去る八月十六日(日)故郷竹田のホテル岩城屋において、卒業二十五周年合同クラス会が開催されました。

我々の生まれた時代は戦後のベビーブームといわれ、過疎現象に悩まされている現在の竹田地方では考えられない、一クラス五十五名が十クラスもあり同期生は五五〇名、竹田高校の歴史の中では最大規模の人数ではないかと思えます。

当時を思い出しますと、我々が入学した一年の秋、伝統の文化祭のフィナ



ーレを飾るファイヤーストームの大爆発の大惨事は今でも脳裏をかすめる事があります。(その後中止になる)また冬のイベントである四十二キロメートルの競歩大会(女子二十キロメートル)等、卒業生全員の思い出として残っていることと思います。

さて、午後三時より現校長の大野寿一先生を始め恩師の先生方十六名、卒業生一二二名合計一三八名の人数で同期会が始まりました。

大分市在住の後藤克巳君の司会で、まず他界された友(九名)を偲んで黙禱し、その後懐かしい先生方のご挨拶を頂きました。

中でも私の在学中、バスケット部の部長をしておられた日高伝先生は、八十歳とは思えぬ若さを感じさせられたのは私一人ではないと思えます。我々が在学中は勿論のこと、冬の競歩大会にご定年を迎えるまでチャレンジされた話の一つの驚きでありました。また車社会の現在でも毎日五キロメートルは歩いておられるとのこと。我々も健康で長生きするための努力をしなければと、改めて教えていただいたように思います。

とは少々困難であったことも事実です。それでも会場の中は独特な雰囲気になり、懐かしい顔、顔、顔、声、声の仲間達が渦巻く人間模様は素晴らしいものです。特にな会場はあつという間に高校時代にタイムスリップしてしまう。また先生方もその時代を思い出されていたのではないのでしょうか。

楽しい時間というものは、一瞬に過ぎて行くもので、フィナーレの時がやってきました。その当時の流行歌、高校三年生、学生時代、を全員で大きな輪になり歌い、最後は懐かしい、戦い勝てり

四十年目の修学旅行

「東京にちよくれ」を合い言葉に三年間、竹田高校卒業四十周年を機会に竹青会全国総会を湯河原温泉で開こうと、関東支部の諸兄弟がおさおさ準備をおこりませんでした。竹青会とは恩師堀三郎先生にいたいた二十七年卒クラス会の名前です。昭和二十七年卒業生とは昭和八年生れを中心とした、いわゆる昭和ヒト桁族の最後に属する、世間では既に化石人類に分類されている人達です。多感な中高年の青春時代を終戦後の大混乱期の中に送らねばならなかった人達です。修学旅行に行くにも家庭経済も許さなかったでしょうし、当時は自分の御飯のお米を持参するか、「外食券」を持参しなければ旅先で食事にありつけないう有様でしたから、卒業

の歌と踊りで一次会場をあとに、「さあ今夜は飲むぞ」とばかり表に出ました。送迎バスに乗り込み二次会場へ到着。でも全員入れないので四会場に分かれ、深夜まで語りあう事が出来たことは、生きていて本当に良かったと思えました。

五年後には卒業三十周年大会を企画するようです。同期生の皆さんの健康をお祈りし、また会える日を楽しみにしております。最後に、お世話をして下さった幹事の方々に心より感謝申し上げます。

得丸正哉 (昭27年卒)

旅行も中止になったのは当然だったので、そんな仲間が「竹青会総会を東京で」と言いだしたのもごく当り前でした。いま、卒業四十周年目というのはいわば「人生の午後四時頃」にあたると言えるでしょうか。遠からず訪れるであろう黄昏を気にしつつ、第二の人生を模索しているけなげな昭和ヒト桁族です。東京開催が決るや直ちに実行委員会を組織して、早速活動に入りました。頻りに集っていましたが、いつもお酒のメートルばかりが上っていたようです。それでも遂に百十人にのぼる出席者が確認され、予算の用途もつき、次表のような旅程、竹青会の旗まで揃ったのは実行委員長殿はじめ有志の方々の

の献身の賜と感謝していただきます。〈行程〉(第一日目)東京駅↓皇居二重橋↓国会議事堂↓新宿高層ビル街↓高速道路↓湯河原温泉 (第二日目)旅館↓箱根・芦ノ湖(海賊船)↓大涌谷↓東京駅

いよいよ総会当日の十一月二十二日を迎えました。集合時間は竹田、大分からの人達の乗った特急富士の東京着十時、場所は丸の内口。三十分も前から三々五々と懐かしい顔々が沸き出るように姿を現わしてきます。そして富士で来た一団が竹青会の旗に誘導されて続々と到着した時がクライマックスでした。四十年振りに再会する顔は仲々思い出せないこともありましたが、たちまち「ハヤちゃん」「キクちゃん」と選歴を前にしたおつむの薄くなったおっさん、真白になったおっちゃん達が叫喚しているのですから周りの人達はさぞや驚いたことでしょう。

恩師の代表として堀三郎先生に御参りいただきました。先生はこの日のために散歩を積まれたお陰で、八十歳とはとても思えぬほどかくしゃくとされて、例の大きな身振りで「晩早く」の夕クトを振られました。私達も先徒のようにならうと一杯歌いました。そして翌二十三日、五年後の竹高創立百周年の日に、竹田で再会することを固く約束しながら短い、楽しかった二日間の卒業四十年目の修学旅行を無事に終えることができました。



クラス会の動き

25会全国大会

田北 忠 (昭25年卒)

昭和二十五年卒業組のクラス会を25会と称しています。25会員は広く全国に散らばっていますが、関東、関西、大分・そして地元竹田の各地でそれぞれ25会があります。平成二年竹田で開催した四十周年記念大会で今後毎年全国大会を行うことを決議し、昨年は関西在住の諸君のお骨折りによって神戸で、今年には岡本雄三君他大分地区の諸君の胆入りで、九月十二日・十三日湯布院で開催され、関東地区からは五人が参加しました。



九月十二日寝台特急富士号は定刻通り到着、私は大分駅に降りました。午後三時半大分駅発の九大線に乗り込むと

満員の車内にぼつぼつクラスメートの顔があるのですが、混雑の中で会話もかなわず、車窓からの景色を楽しみながら湯布院に到着しました。やあやあ」と声を掛け合いながら三三五五会場の湯布院山荘へ約五分の道のり、受け付けで部屋割りを受け浴衣に着替え温泉に浸かって会場の大広間へ。一年ぶり、数年ぶり、数十年ぶり、あるいは卒業以来の懐かしい顔ぶれが揃い、たちまち

少年に戻り、盛大な宴会が始まりました。同伴の三人の夫人方もわだかまりなく解け込んで大いに盛り上がりました。夜が更けても話は尽きず、二日におたつての歓談も各部屋で続けられました。

明けて十三日は楽しい遠足、都合の悪い人もあつて残念ながら全員参加とはいきませんでした。バスに乗り込みアフリカンサファリへ。珍しい動物群を見たり、売店を冷やかしたりして腹をすかし、安心院の大交ホテルで昼食。地元のワインと名物のスッポン料理はなかなかのもので、精力増強を願って二人前、三人前を平らげる友もいました。次は、国東巡り、小河敦君から

会員の語らい

ニコライ堂のある風景

高山 英一 (昭17年卒)

・お茶の水を受す

私は仕事の関係で世界の都市計画地図を見ることがある。例えば、アムステルダム、パリ、ローマ等々。

或る日、お茶の水周辺の地図を見て驚いたことには、近代都市に必要な施設が全て揃っているのではないか。それも整然と駅を中心にやや放射状に：ホテル、学校、病院、教会、川、橋、そして、住宅、商店街。地図で見ると、決してバリエーションが乏しい都市計画である。それなのに駅を降りて街を歩くと、何故かバリエーションにも違ふ。それは何故であろうか？人の群れ？、姿？、

騒音？、道幅？の違いであろうか。もし(サイレント)で街を撮ってみたら：小さな並木道、そして青い空が撮れるであろうか？ それよりも絵に描いてみるのだ。

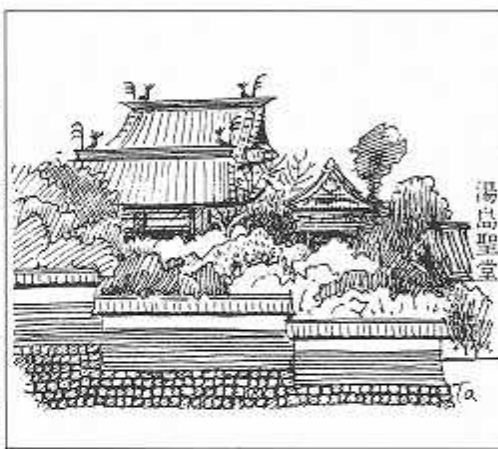
空間を求めてお茶の水周辺をスケッチすることをすすめる。日本的でパリ風な絵ができるかも知れない。

・坂のある風景

街は坂から成り立つようだ。猿楽町への坂道、駿河台にある明大、日大裏の山の上ホテル、そして男坂、女坂の石段、猿楽町、坂を見上げ、坂から見下ろ

宇佐神宮、国東諸霊場の由来などについて懇切な説明がありました。熊野鷹崖伝では、険しい参道備え付けの竹杖を借りて登るのですが、スッポンには即効性はないらしく、皆苦勞したようでした。続いて真木大宮、両子寺と霊場に詣でて楽しい二日間の修学旅行を終え、めでたく大分駅前解散いたしました。

来年は関東組が当番と決まり、すでに実行委員会を設置し、来年秋開催を目指して準備に取りかかっています。盛會を祈るのほもちろんですが、25会の楯の歯もすでに十数枚欠けており、お互い欠け落ちる前に是非とも多くの友と旧交を暖めたいと願う次第です。



す街の美と建築のたまたま、愛すべき風景がそこにある。古い病院の窓、萬のからまる古い館、学校、アテネフランセの紫色の校舎、お茶水の赤、黄、青に塗り分けられた大胆な色彩など、ユトリロや佐伯祐三ばりの軽いタッチで描きたくなる風景である。

内科、小児科、呼吸器科
医療法人 社団 留高医院
理事長 留高照幸
医学博士
出身 緒方町 (昭20年卒)
東京都東大和市新堀1-1421-28
TEL 0425-61-1809

ふるさとの香り、おくります。
椎茸、かぼす、山菜佃煮
(株) 姫野一郎商店
大分県竹田市大字竹田町235
TEL 0974-63-2853
FAX 0974-63-0528

・お茶の水

お茶の水の名称と歴史は徳川時代から始まる。高林寺の庭の名水が將軍のお茶の水になり、駿河台の名称の起りは、駿府城の家康死後の家臣に神田台の屋敷を与え、「駿河台」と呼ばれた。明治と共に江戸文化は終わり洋風化したこの街にも、昔ながらの名称は今も残っている。夕暮れのニコライ堂、聖橋、そして明るい学生街の通り、キリスト教会、病院街、特に神田川ぞいの東京医科歯科大の茶(トヒ色)とクリーム色のビル街は良い。駅から放射状に延びる道には画材店あり、喫茶店あり、スリッパ店など絵になる情景が散在している。

会員の語らい

萩の花に母を想う

後藤 紀子 (昭28年卒)

で温かい。平成四年九月七日母は他界した。私はなぜかずっと萩の花を想い母を慕った。母は大正十二年に大分県立になった竹田高等女学校へ入学、昭和二年卒業。妹本田波子(昭四卒)花子(昭九卒)菊子(昭一六卒)と萩村から四人姉妹が、一村から数えられるほどしかいなかった当時、祖母は教育ママであった。私の母も祖母をまねて子達へラブコール。祖母と母のひそかな期待のまなざしを

私は常に感じながら育った。竹田高女の校歌「努め、つとめて、磨き、みがきて、久住の峯の高さに 稲葉の川の清さに」と、母はその多難な人生を生きた。今日ある私の一番の理解者、後援者は母であり、父母の生地、竹田がいかに大きく私にかかわったか、はかりしれない。この道を ゆく人なしの 秋の暮 (芭蕉)

坊がつる讃歌

宮崎 加代 (昭42年卒) (旧姓利根)

今年の夏は、竹田の名を何度も耳にした。まず八月十六日二十五年ぶりに四十二年卒業のわれわれ同期生が、竹田で同期会を開いたことである。残念ながら私は、これには出席できなかった。しかし、それに代わるくらいうれしかったことは、久住から高校時代の親友を我が家に迎えることができたことだ。翌日箱根の杉並木の中を二人で歩きながら、二日前に行なわれた同期会のことを想像して楽しく語り合った。

竹田の話に花が咲いたのである。同僚は日教組の全国大会に神奈川県中教組の代表として参加したのだった。私は、今年度の大会が大分県で、しかも竹田であることをまったく知らなかった。数日後、「臥牛」の第六号が届いた。今回、最も心をひかれた記事は、「坊がつる讃歌」である。芹洋子さんの歌うこの歌が大好きでいつか覚えたいと、ずっと思っていたからだ。さっそく台所の壁に貼って四番までふた晩で覚え込んだ。そして翌日、この会報を持って出勤した。音楽専科の先生に「坊がつる讃歌」をお見せして、これが竹田の久住高原を歌ったものであることをお知らせしたかったからだ。「先生の生まれたところって、すてきですね。この会報読ませて下さい。」と、読み終えた彼女が「先生、この同窓会報は、すごく質が高いですよ。これだけの会報出している

第21全国菓子大博覧会
三笠宮名誉総裁賞受賞
登録商標 登録商標
荒城の月 三笠山
御菓子司 自由堂 (有)川口自由堂
本店: 竹田市駅通り ☎ 0974-63-3258(代) FAX 0974-63-3549
国道店: 国道37号線拜田原 ☎ 0974-63-3260
大分店: 大分市牧(西萩原バス停前) ☎ 0975-56-0121

九月三十日付の手紙、私の自分史、「花筏」にまつわる随筆を、七十行ほどで書くようにと、「臥牛」の編集担当の、日本バーカーライジングの藤沢さんから原稿依頼があった。母の喪中の原稿依頼の符合に、私はふと不思議を感じ、これは両親の死を書かざるを得ないと思ってしまった。

萩はしっかりとたくさん花をつけるが、生憎の季節の台風に吹き荒されて、樹下一面に花を落してしまふ。山上憶良が、秋草の筆頭に数えるまでもなく、当時の代表花梅が一八首なのに、なぜかそれ以上に、萬葉人の心に残る花は萩の一四一首が最高。以後、古今、新古今と続いて一番多くうたわれ続けた萩。紅紫色や白の小花が房状について、枝のしなりが美しい。

萩は木とも、草ともみえるので、いけばなでは草木通用ものとしての扱いで、木にも草にもよく似合う。茶花では釣舟、掛花、籠花にと多く用いられている。「今年の夏は猛暑だから、秋風がたつたら退院しましょう」と、母は半年以上の入院で、動かなくなった手に、お手玉を持ち、二十センチ以上も投げられるようになったとがんばっていた。「どうして、こんなことになったのか、口惜しい」といって涙ぐんだりもした。

もうひとつは、職場の同僚が竹田を訪れたことである。九月初め二学期が始まってすぐの頃、校長先生から「宮崎さん、おとといK先生が竹田から帰ってきましたよ。竹田は君の出身地ではないか」と、お話があり、思いもかけず

高校ってあまりないんじゃないですか。」とおっしゃった。この時は、竹田高校の古い歴史と輝かしい伝統を改めて実感した。K先生にもお見せすると、「ああ、この歌、行きの飛行機の中で説明がありましたよ。着いてからも教えてもらいました。とにかく、あの岡城址はすごいですねえ。」と、ここでもひとしきり岡城のことに話はずんだ。またその数日前、朝日新聞の「窓」の記事になんと竹田のことが出ていたのである。運動会が終わって、やっと静けさを取り戻した教室で、毎日、朝の歌に子供たちと「坊がつる讃歌」を歌っている。ちよつとむずかしいけれど、何よりも私が毎朝歌えることが楽しい。



東宮御所に納めた赤松三幹樹高一メートルの工芸盆栽

秋霖に散り敷く萩の花が、まるで波打ち際の桜貝のように美しい。清らかな

今年、行きの飛行機の中で説明がありましたよ。着いてからも教えてもらいました。とにかく、あの岡城址はすごいですねえ。」と、ここでもひとしきり岡城のことに話はずんだ。またその数日前、朝日新聞の「窓」の記事になんと竹田のことが出ていたのである。運動会が終わって、やっと静けさを取り戻した教室で、毎日、朝の歌に子供たちと「坊がつる讃歌」を歌っている。ちよつとむずかしいけれど、何よりも私が毎朝歌えることが楽しい。

今年、行きの飛行機の中で説明がありましたよ。着いてからも教えてもらいました。とにかく、あの岡城址はすごいですねえ。」と、ここでもひとしきり岡城のことに話はずんだ。またその数日前、朝日新聞の「窓」の記事になんと竹田のことが出ていたのである。運動会が終わって、やっと静けさを取り戻した教室で、毎日、朝の歌に子供たちと「坊がつる讃歌」を歌っている。ちよつとむずかしいけれど、何よりも私が毎朝歌えることが楽しい。

今年、行きの飛行機の中で説明がありましたよ。着いてからも教えてもらいました。とにかく、あの岡城址はすごいですねえ。」と、ここでもひとしきり岡城のことに話はずんだ。またその数日前、朝日新聞の「窓」の記事になんと竹田のことが出ていたのである。運動会が終わって、やっと静けさを取り戻した教室で、毎日、朝の歌に子供たちと「坊がつる讃歌」を歌っている。ちよつとむずかしいけれど、何よりも私が毎朝歌えることが楽しい。



